



現代名作集
(二)

日本文学全集 64

日本文学全集 64 現代名作集(二)

昭和四十五年十一月一日発行

著者 有島生馬

代行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一一七六五一(代表)
振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社
本文印刷 株式会社精興社
製本 和田製本工業株式会社

現代名作集(二) 目次

加能作次郎

久米正雄

恭三の父……………五

競漕……………二七

吉井勇

水上瀧太郎

俳諧亭句楽の死……………二五

ベルファストの一日……………二三

豊島與志雄

細田民樹

恩人……………三

初年兵江木の死……………一四

藤森成吉

武林無想庵

雲雀……………一四

ピルロニストのやうに……………一五

有島生馬

倉田百三

鳩飼ふ娘……………一五

俊寛……………一六

宮嶋資夫

秋田雨雀

坑夫……………一六

国境の夜……………二三

小川未明

赤いらふそくと人魚……………二七

小島政二郎

一枚看板……………二五

小山内薫

息子……………二六〇

前田河廣一郎

三等船客……………二六九

十一谷義三郎

静物……………二三八

岸田國士

チロルの秋……………三三

佐佐木茂索

曠日……………三五

片岡鐵兵

綱の上の少女……………三四

黒島傳治

櫓……………三六

嘉村礒多

業苦……………三〇

犬養健

亜刺比亞人エルアフィ……………三五

田畑修一郎

鳥羽家の子供……………四二

年譜……………四四

解説……………吉田精一 四五

現代名作集(二)

恭三の父

加能作次郎

手紙

恭三は夕飯後例の如く村を一周して帰つて来た。

帰省してから一カ月余になつた。昼はもとより夜も暑い
のと蚊が多いのとで、予て計画して居た勉強などは少しも
出来ない。話相手になる友達は一人もなし毎日々々単調無
味な生活に苦しんで居た。仕事といへば昼寝と日に一度海
に入るのと、夫々故郷へ帰つて居る友達へ手紙を書くのと、
かうして夕飯後に村を一周して来ることであつた。彼は以
上の事を殆ど毎日欠かさなかつた。中にも手紙を書くのと
散歩とは欠かさなかつた。方々に居る友達へ順繰りに書いた
大方端書であつた。彼は誰にも彼にも田舎生活の淋しい単
調なことを訴へた。そして日々の出来事をどんなつまらぬ
事でも書いた。隣家の竹垣に蝸牛が幾つ居たといふことで
も彼の手紙の材料となつた。何にも書くことがなくなると、
端書に二字か三字の熟語の様なものを書いて送ることもあ
つた。斯んなことをするのは一つは淋しい平凡な生活をま

ぎらすためでもあるが、どちらかと言へば友達からも毎日
返事を貰ひたかつたからである。友達からも殆ど毎日消息
があつたが時には三日も五日も続いて来ないこともあつた。
そんな時には彼は堪らぬ程淋しがつた。郵便は一日に一度
午後の八時頃に配達して来るので彼は散歩から帰つて来る
と来てゐるのが常であつた。彼は狭い村を彼方に一休み此
方に一休みして、なるべく時間のかゝる様にして周つた。
そして帰る時には誰からか手紙が来て居ればよい、いや来
て居るに相違ないといふ一種の予想を無理にでも抱いて楽
みながら帰るのが常であつた。

今夜も矢張さうであつた。

家のものは今蚊帳の中へ入つた所らしかつた。納戸の入
口に洋灯が細くしてあつた。

「もう寝たんですか。」

「寝たのでない、横に立つて居るのや。」と弟の浅七が洒
落をいつた。

「起きとりや蚊が攻めるし、寝るより仕方がないわいの。」
と母は蚊帳の中で団扇をバタつかせて大きな欠伸をした。

恭三は自分の部屋へ行かうとして、

「手紙か何か来ませんでしたか。」と尋ねた。

「お、来とるぞ。」と恭三の父は鼻のつまつた様な声で答
へた。彼は今日笹屋の土蔵の棟上に手伝つたので大分酔つ
て居た。

手紙が来て居ると聞いて恭三は胸を躍らせた。

「えッ、どれッ!!」慌てて言つて直ぐに又、「何処どこにありませんか。」と努めて平氣に言ひ直した。

「お前のそこへ来たのでない。」

「へえい……。」

急に張合が抜けて、恭三はぼんやり広間に立つて居た。

一寸間を置いて、

「家へ来たんですか。」

「おう。」

「何処から?」

「本家の八重さのところからと、清左衛門の弟様おつきさまの所から。」

と弟が引き取つて答へた。

「一寸読んで見て呉れ、別に用事はないのやらうけれど。」

と父がやさしく言つた。

「浅七、お前読まなんだのかい。」

恭三は不平さうに言つた。

「うむ、何も読まん。」

「何をヘザメザ言ふのやい。浅七が見たのなら、何もお前に読んで呉れと言はんない!! あつさり読めば宜いのぢやないか。」

父親の調子は荒かつた。

恭三はハツとした。意外なことになつたと思つた。が妙な行きがかりで其儘あつさり読む氣にはなれなかつた。それで、

「何処にありますか。」と大抵其在所が分つて居たが殊更ことさら

に尋ねた。

父は答へなかつた。

「炉縁の上に置いてあるわいの。浅七が蚊帳へ入つてから来たもんぢやさかい、読まなんだのやわいの。邪魔でも一寸読んで呉きんさい。」と母は優しく言つた。

恭三は洋灯を明るくして台所へ行つた。炉縁の角の所に端書と手紙とが載つて居た。恭三は立膝のまゝでそれを手にとつた。

生温い灰の香が鼻についた。蚊が二三羽耳の傍で唞ひらつた。恭三は焦立つた氣持になつた。呼吸がせはしくなつて胸がつかへる様であつた。腋の下に汗が出た。

先づ端書を読んだ。京都へ行つて居る八重といふ本家の娘からの暑中見舞であつた。手紙の方は村から一里余離れた富来町とみきまちの清左衛門といふ呉服屋の次男で、つい先頃七尾の或る呉服屋へ養子に行つた男から来たのであつた。彼は養子に行く前には毎日此村へ呉服物の行商に來た男で、弟様といへば大抵誰にも通ずる程此村に出入して居た。恭三の家とは非常に懇意にして居たので、此処を宿にして毎日荷物を預けて置いて、朝來てはそれを担つて売り歩いた。今度七尾へ養子に行つたのについて長々厄介になつたといふ礼状を寄越したのであつた。

恭三は両方共読み終へたが、不図ふとした心のはずみで妙に間拍子が悪くなつて、何でもない事であるのに、優しく説明して聞かせることが出来にくいやうな氣持になつた。で

何か言はれたら返事をする積りで煙草に火をつけた。

蚊が頻りに攻めて来た。恭三は大袈裟に、

「非道い蚊だな！」と言つて足を叩いた。

「蚊が居つて呉れねば、本当に極楽やれど。」と母は毎晩

口癖の様に言ふことを言つた。

恭三は何時までも黙つて居るので、父は、

「読んだかい？」

「え、読みました。」と明瞭と答へた。

「何と言ふて来たかい。」

「別に何でもありません。八重さのは暑中見舞ですし、弟

様のは礼状です。」

「それだけか？」

「え、それツ限です。」

「ふーむ。」

恭三の素気ない返事がひどく父の感情を害したらしい。

それに今晩は酒が手伝つて居る。それでも暫くの間は何と

も言はなかつた。やがてもう一度「ふーむ」といつてそれ

から独言の様に「さうか、何ちうのー。」と不平らしく恨

めし相に言つた。

恭三は父の心を察した。済まないとは思つたが、さて何

とも言ひ様がなかつた。

「もう宜い、く、お前に読んで貰はんわい、これから：

。へむ、何たい。あんまり……。」

恭三はつとめて平氣に、

「このお父様は何を仰有るんです。何も別にそれより外のことはないですよ。」

父は赫と怒つた。

「馬鹿言へツ！ それならお前に讀うで貰はいでも、己り

やちやんと知つとるわい。」

「でも一つは暑中見舞だし、一つは長々お世話になつたといふ礼状ですもの。他に言ひ様がないぢやありませんか。」

「それだけなら、おりや眼が見えんでも知つとるわい。先

刻郵便が来たとき、何処から来たのかと郵便屋に尋ねたの

ぢや、そして、八重さ所からと、弟様とこからと来たの

やと言ふさかひ、そんなら別に用事はないのや、はゝん、

八重さなら時候の挨拶やし、弟様なら礼手紙をいくいたの

やなちうこと位はちやんと分つとるんぢや。お前にそんな

事を言うて貰ふ位なら何も讀うで呉れと頼まんわい。」

「だつて……」

「もう宜い、宜いとも！ 明日の朝浅七に見て貰ふさかひ。

さア寝て呉れ、大い御苦勞でござつた。」と皮肉に言つた。

かう言はれると恭三も困つた。黙つて寝るわけにも行か

ぬし、さうかと言つて屈從する程淡泊でもなかつた。こゝ

で一寸氣を変へて、「悪うございました。」と一言謝つてそ

して手紙を詳しく説明すれば、それで何の事もなく済んで

了ふのであることは恭三は百も承知して居たが、それを実

行することが頗る困難の様であつた。妙な羽目に陥つて蚊

にさされながら暫くモヂモヂして居た。

「ぢやどう言ふたら宜いのですか？」と仕方なしに投げだす様に言つた。

「己りや知らない。お前の心に聞け！」

今まで黙つて居た母親は此時始めて口を出した。

「もう相手にならんと、蚊が食ふさかひ、早う蚊帳へ入らつしやい。お父さんは酔ふとるもんで、又いつもの愚痴が始まつたのやわいの。」

「何ぢや！ おれが酔ふとる？ 何処に己りや酔ふて居るかいや。」

「さうぢやないかいね、お前様、そんなね酔ふて愚痴を言ふとるぢやないかね。」

「何時愚痴を言ふたい？ これが愚痴かい。人に手紙を読むでやるのに、あんな読方が何処の国にあるい？」

「あれで分つてゐないかいね、執拗い！」

「擲きつけるぞ！ 貴様までが……」と父は恐しい権幕になつた。枕でも投げようとしたのか、浅七は、

「父様何するがいね、危い。……この母様まだ黙つて居らつされかア。」と仲裁する様に言つた。

「まるで心狂のやうやが。」と母は稍々小さな声で言つた。

奥の間の方から猫がニヤンと泣いてのそ／＼やつて来た。それで父親は益々癪に触つたと見えて、

「屁糞喰らへ！」と嘯鳴りつけた。

母と弟とはドツと笑ひ出した。恭三は黙つて居つた。猫は恭三の前に一寸立ち止つて、もう一度ニヤンと啼いてす

とすと庭に下りて行つた。父親は独言の様に、

「己りやこんな無学なもんぢやさかい、愚痴やも知れねど、手紙といふものはそんなもんぢやないと思ふのぢや、同じ暑さ見舞でも種々書き様があらうがい。大変暑なつたが、そちらも無事か私も患災に居る。暑いさかい身体を大切にせいとか何とか書いてあるぢやらうがい、それを只だ一口に暑さ見舞ぢや礼手紙ぢやと言ふた丈では、聞かして貰ふ者がそれで腹がふくれると思ふかい。お前等みたいに眼の見える者なら、それで宜いかも知れねどな、こんな明盲には一々詳しく読んでかして呉れるもんぢやわい。」大分優しく意見する様に言つた。

恭三も最早争ふまいと思つたが、

「だつてお父様、こんな拝啓とか頓首とかお定り文句ばかりですもの、いくら長々と書いてあつても何にも意味のないことばかりですから、そんなことを一々説明してもお父様に分らんと思つてあゝ言つたのですよ。悪かつたら御免下さい。」

「分らんさかひ聞くのぢやないか。お前はさう言ふがそりや負惜みといふものぢや、六かしい事は已等に分らんかも知れねど、それを一々、さあかう書いてある、あゝ言うてあると歌でも読む様にして片端から読むで聞かして呉れりや嬉しいのぢや。お前が他人に頼まれた時に、それで宜いと思ふか考へて見い。無学な者ちう者は何にも分らんとつて、一々聞きたがるもんぢやわい。分らないでも皆な読むで

貰ふと安心するといふもんぢやわい。」と少し調子を変へて、「お前の所から来る手紙は、金を送つて呉れつて言ふより外ね何も無いのやれど、それでも一々浅七に初めから読ますのぢや。それを聞いて己でも、お母さんでも心持よく思ふのぢや。」

「そりや私の手紙は言文一致で、其儘誰が聞いても分る様に……」と皆まで言はぬ中に、

「もう宜い!!」と父親は鋭く言ひ放つた。そして其後何とも言はなかつた。

恭三は何とも言はれぬ妙な氣持になつて尚ほ暫くたつて居たが、やがて黙つて自分の部屋へ行つた。

祭見物

「お父さんな、まだ帰らんのか。」と浅七は外から這入つて来た。家の中は暗かつた。囲炉裏の中には蚊遣の青葉松が燦つて居た。

「まだや。」と母親は漬物を刻みながら無頓着に答へた。

「何ちう遅いな、皆もう帰つたのに。」

「もう間がないだらうよ。」と恭三は燃えかゝる松葉を火箸で押へながら言つた。煙は部屋中になつて居る。洋灯の光は薄暗く其煙の中に見える。

「どうやら分らんぢや。屹度七海の連中に引張られて飲んどのぢやらう。」と母は言つた。

「今年や七海に神輿を買うて、富来祭に出初めやさかひ、大方家のお父様ねも飲ましとるに違ひないねえ。」

浅七は炉の中から松葉を二三本取つて揃へたり爪で切つたりしながら言つた。

「宜い加減に帰りやいゝのやれど、ほんとね飲んだと来たら我身知らずで困るとこ、……さあ、待つとらんとお前たちや先に飯をすまいたらよからう。いつ帰るやら分らんもの。」と母親はお膳を出しかけた。

「まあもう暫く待つて見ませう。」と恭三が言つて、煙にむせて二三度咳をした。

「六平の者共は帰つたかいね。」と浅七が尋ねた。

「六平もまだや、さき方囃さ迎に行つたれどどつちも帰らんわいの。子供を仰山連れとるさかひに大丈夫やらうけれど、あんまり遅いさかひまた子供を放つといて飲んで歩くのやないかちうて心配しながら行つた。」

「あの六平の禿籠も飲助やさかひなう。此前もほら酒見祭を見ね行つた時ね、お前様、あの常坊を首馬に載せたなりに田圃の中へきせ転がつたぞかい。」と浅七は恭三に向つて話した。

こんな話をして居る時、外から「御馳走がありますか。」と言つて這入つて来たものがあつた。

「誰様や?」と恭三の母は伸び上つて庭の方を見た。

「おれ様や! おやまア、こりや何ちう煙たいこつちやいの、咽喉ア塞つて了ふがいの。」

「うむ権六さか。何うも早や蚊でならんこと。お前様たちの所は何うや？」

「矢張居つて困つたもんぢや。」

かう言つて家の中を覗いて恭三と浅七の居るのを見て、

「お、お前達は見に行かなんだのか。」

「何を。」と浅七が言つた。

「彼等はお前様、昨夜は夜祭を見ね行くし、明日は角力に行かんらんさかひ。」

「さうや、もう弟様らちは若い衆やさかひの。」

「まあ上らんかいの。」

「えんぢや、さうして居られん。一寸聞きたいことがあつて来たのやが。」と此人の癖であるが勿体らしく前置きして、「どうや此家の親爺様は帰らつしやつたか。」

「まだや、今も其話をしとる所やとこと。」

「さうか。うちの親爺もまだで、あんまり遅いさかひ、どうかと思ふて来たのやとこと。」

「えーい。そこな親爺様も行つたのかいね。さうかいね、まあ、こりや何ちうこつちや！」

恭三の母は如何にも意外だといふ風に言つた。

「まことね、あんな身体して居つて、程のあつた、何う氣が向いたか出掛けて行つたわいね。」

「必然家の恭さんと一緒に飲んだるんやらう。」と浅七が口を入れた。

「さうかも知れん。」と権六の妻君が言つて、少し氣を変

へて、「今年の祭は大交賑かやつたさうな、何でも神輿が二十一台に大旗が三十本も出たといね。」

「えいさうかいね、何んせ近年にない豊作やさかひ。」

「おいね、然う言うて家の親爺も、のこゝと出掛けて行つたのやとこと。もう帰りさうなもんぢやがなう。」

「それでも其家の親爺様は幾何飲んでも、家の親爺の様に性根なしにならんさかひ宜いけれど。」

「さうでも無いとこと、……まあもう暫く待つて見ませう。」

かう言つて権六の妻君は帰つた。

それから暫くしてから隣の六平が子供を連れて歸つて来た。先刻迎ひに行つた女房とは途が違つて遇はなかつたといふことだつた。

「可愛相に、お前はまた何で浜通り来なんだがいの？」と恭三の母は女房に同情を寄せた。

「私もさう思ふたのやれど、山王の森まで見に行つたもんやさかひ、あれから浜へ戻るのが大変やし、それに日も暮れたもんで内浦通来たのやわいね。」と当惑したといふ様子であつた。

「そりやさうと、うちの親爺に遇はなんだかいの。」

「あのう、神輿様が町尽れに揃はつしやつた時ね、飛驒屋の店に権六の親爺様と一緒にござつたが、それから知らんなね。」

六平は引返して女房を迎ひに行つて来るから子供を暫く

見て居て呉れと頼んで行つた。三人の子供は恭三の家へ入つて炉の傍で土産の饅頭を喰ひ始めた。六つになる女の子が餡がこぼれて炉の灰の中へ落ちたのを拾つて食べた。恭三は見ぬ振りをして横を向いた。

三十分程たつて六平は女房と一緒に帰つて来た。恭三の父はまだ帰らなかつた。併し六平の女房と村の入口まで一緒に来たことは女房の話で分つた。

六平の女房が、富来の町から八町程手前の小釜の森の下まで来た時、恭三の父は只一人暗がりに歌を唄ひながら歩いて居た。もう此時分は祭見物に行つたものは大方帰つて了つて、一里の浜路には村の者とは誰にも遇はなかつた。亭主や子供に遇はないので如何したことかと心配しながら淋しいのを堪へて小釜の森まで来た。此処は昔から狐が出るので有名な所である。六平の女房は淋しい淋しいと思ひながら行く toward 向ふの方から歌聲がするので非常に吃驚した。そしてそれが恭三の父であつたので尚更驚いた。恭三の父は足元も危い位に酔つて居た。六平の女房を見ると突然、「貴様何しに来た？」と呶鳴つたので女房はヒヤツと飛び上つたさうである。子供を迎ひに來たのだと言ふと、「馬鹿！ 今時分まで何して居るもんか、疾うに帰つて了つた。富来にも誰も村の者は居らんさかひ帰れ帰れ。」と言つた。「己りや今時分まで一人何して居つたと思ふかい。ふむ、かう見えても一寸も酔つて居らんぞ。己れはな。村の奴等が皆帰つたかどうか、ちやーんと見極めて帰つて來たのぢ

や、いくら酔うて居つても、おれは貴様、もしもの事があつてはと思つて今まで残つて居つたんぢや。もう富来には誰も居らんぞ。さあ帰ろ帰ろ。」

六平の女房は後について歩いた。恭三の父は幾度も幾度も仆れかゝつた。

「あ、酔ふた／＼、五勺の酒に……」

一合飲んだら………」

と唄ふかと思ふと、「こら！ 嬬さ、六平の嬬あ！ 貴様何しに來た？」といつたり、「やあ、小釜の狐、赤狐！ 欺されたら欺して見い。こら、貴様等に……馬鹿狐奴が、へむ。」などと出放題の事を言つたりした。

斯んな風で村の入口まで一緒に來たが、それから六平の女房に先に帰れと言つて承知しなかつた。一緒に帰つては間男でもしたと思はれるから不可ないつて戯談を言つて、如何言つても動かなかつた。かう言つて二人が争つて居る所へ六平が行つた。六平も種々にすゝめて一緒に連れて帰らうとしたが、新道の橋の上に坐つて居て如何しても動かなかつた。多分迎ひに來て貰つた人に思はれるのが気に入らぬのだらうと皆が言つた。浅七が提灯をつけて裏口から出掛けたのを、母は呼止めてやめさせた。十分間も経つてから父は帰つて來た。

「帰つたぞ、おい旦那様のお帰りやぞ。」と上機嫌に裏口から入つて來た。

「お帰り。」

と母も浅七も同時に言つた。浅七は庭へ下りて洗足の水を汲んだ。

「さあ洗へ。」

と父は上り段に腰掛け仰向けになつて了つた。浅七は草鞋の紐を解いて両足を盥の中へ入れさせた。母は冷めかけた汗の鍋を炉に吊して火を燃やした。恭三は黙つて立膝の上に頭をもたせて居た。

「恭三！ 貴様は何んで己の足を洗はんか。」と父は嗚咽つた。

恭三は意外に思つたが、何にも言はずに笑つて居た。

「己れが帰つたのに足位洗はんちう法があるか、浅七がかうして洗うて居るのに、さあ片足づつ洗へ。」

恭三は直ぐに父の命令に服しかねた。けれども又黙つて居る訳にも行かなかつた。勿論父は真面目にこんなことを言ふのだとは思はない。が如何に父が酔つて居ても其儘に笑つて済ますことは出来ぬと思つた。

父は酔つた時に限つて恭三に向つて不平やら遠回しの教訓めいたことを言ふのを恭三は能く知つて居た。父もまた素顔で恭三に意見することの出来ぬ程恭三は年もとり教育もあることを知つて居た。それで時々酔に托して婉曲な小言を言ふことがあるのであつた。それは多くの場合母に対する義理からであつた。母は恭三の実母でない。だからこの場合に於ても実子の浅七がかうして父の足を洗つて居る

のに、恭三が兄だからと素知らん顔して居ると思はれるが心外だといふ父の真情からさう言つたのかも知れぬ。父は恭三一人あるために今日までどれ程母に気兼ねをしたか知れない。恭三はよく之を知つて居た。かうして酒に酔つて居る時に却て溢れる様に父の真情が出るのを恭三は幾度も経験して居た。或は又酔うて居るのを幸ひに二人の息子に足を洗はせて、其所に一種の快味を味はうといふ單純な考からであるかも知れぬと思つた。併し恭三は父が如何に酔つても全く我を忘れることはないと思つて居た。他の人にはさう見えても恭三のみには如何してもさう思はれなかつた。無学無知な一漁夫に過ぎぬけれど酔ふた時には何となく感慨の深いことを言ふ。父としての情は決して單なる溺愛的のものではない。淋しい様な悲しい様な哀れな父の心情が強い言葉の裏にかくれて居る。之れを恭三は能く味ひ知つて居た。そして恐らく之を知つて居るものは恭三の外にあるまい。恭三は酔ふた父に対すると常に一種悲痛な感

を味ふのであつた。今父が恭三に足を洗へと言つたが、全く彼に洗はす積りで言つたのでなからうとは思つたものの、此の場合にうまくとりなすには如何してよいか一寸分らなかつた。

「私は弟に頼んだんです。浅七、おれの代理をつとめて呉れよ。」と彼は深く考へもせず言つた。

これを聞いて父は大に満足したといふ風であつた。「さうか、そんなら宜い。」

かう言つて妙な声で唄ひ出した。

足を洗つてからも尚ほ暫く父は上らなかつた。

「さあ、宜い加減にして上らうぞ。」と母はお膳を並べた。皆膳に向つた。けれども父は如何にしても箸を取らうとはしなかつた。

「恭三、お前は己の帰るのを飯も食はずに待つて居つたのか。」

「え。」

「浅七もか？」

「あい、待つて居ました。」

「さうか、よく待つて居つた。さあ已りや飯を食べるぞ、いゝか。」

「さあ一緒に食べんかいねえ。」と母は箸箱を手に取つた。父は「ふふむ。」と笑つて居てなか／＼膳に向はなかつた。囲炉裏に向つて、胡座の膝に両手をさしちがへて俯

向き加減になつて、つまつた鼻をブン／＼言はせて居た。酒に酔ふと何時でも鼻をつまらせるのが癖であつた。

「さあ、早く食べんかいねえ。」と母は又促した。

「おりや食ひたうない。お前等先に食へ。」

「そんなことを言はんと、一緒に食べんかいね、此人あ、皆な腹減らかいて待つて居つたのに。」

「お、さうか／＼、有り難い。今食べるぞ。」と言つたが中々食べかけなかつた。

「山高帽子が流行して、

禿げた頭が便利だね。オツベケベ……」

かう唄つて「ハハハ、」と大声に笑つた。

母はもどかしさうに、

「もう関はんと先に食べんかの」と恭三に向つて言つた。

「お父さん、少し食べないと、夜またお腹が減きますぞ。」と恭三はすゝめた。

父は一寸頭だけふり向けて恭三の顔をじろりと眺めた。

充血した眼は大方ふさぎかゝつて居た。てか／＼と赤光に光つた額には大きな皺が三四筋刻んだ様に深くなつて居るのが恭三の眼にとまつた。

「さあ早う、お汁が冷めるにな。」

母は自烈体さうに言つて箸を取つた。

「うむ……。」と父は独り合点して又笑つた。「今日は本當ね、面白い祭ぢやつた。」

「一寸祭の話でもして聞かせて下さい。」と恭三は飯を盛りながら言つた。

「よし／＼。」

父が祭の話をし始める時分には皆な飯を済まして居た。それでもまだ彼は食べかけなかつた。そして種々と祭の話をした。同じことを何度も／＼繰り返しては言つた。

「七海があんな小さな在在所で神輿を買うて富来祭の仲間入をしたのは本當に偉い。已りや何よりそれが嬉しかつた。何も祭なんか見たいことはないのぢやが、七海の神輿が出るちうさかひに、それを見に行つたのぢや。……己が行つ

たら、お前、七海の連中が郵便局の前に神輿を下ろいて休んで居つたが、おれの顔を見るなり、『おゝ、浅次郎が能う来た』ちうて橋本の親爺が三升樽をやりつけて来て飲ますぢやらう、お前、そうした所が、太鼓の連中も大旗の連中も皆己れの顔を知つとるもんで、『お、浅次郎、来たか来たか。』ちうて酒を持つて来て、まるで酒責にあはした様なもんぢやつた。七海の連中は偉いわい、あんな小さな村しとつて、これから大村と一緒に交つて祭を為るかと思ふと氣味が宜うてなあ、そこで己りや二円だけ寄付してやつたら、直ぐに、『金五円也……』と目録を書いて神輿の屋根の上に張り付けたぞや。」などと自分が何処へ行つても顔が売れて居ること、殊に七海の村人には殆ど恩人の様に思はれて歓迎されるのを得意げに種々手真似などして話した。

浅七は、それから／＼と巧に話の糸口を引き出した。

若い人足共の喧嘩けんかの事、人出の多かつた事、二十台あまりの神輿が並んだ時の立派さ、夕日が照り返して、鏝かきりの金物がピカ／＼と光つて綺麗に見えた事などを幾度も／＼繰り返した。巡查に相手になつて困らせたことを如何にも得意になつて話した。恭三も表面だけは如何にも面白さうな様子をして時々調子を合せて、つとめて父の氣に入りさうな事を聞いて見たりした。

父は此上もなく喜んだ。恭三達が自分の話を皆面白相に聞いて居るのを見て如何にも満足に思つたらしい。何時の

間にか其処に横になつて大きな薪いじきをかき出した。三人して引摺ひきずる様に蚊帳の中へ入れるのも知らなかつた。母は飯を食べなかつた事を何度も呟さややいた。

(明治四十三年七月)